平成14年度全日本
男子選手権を予想する

ポスト村越を占う、第29回全日本

山本英勝

新潟で行われる今年の第29 回全日本オリエンテーリング大会、男子選手権の行方は混沌としている。昨年の覇者村越は今年結果を出せず、一度もエリートランキング大会を勝っていない。昨年はプレッシャーに崩れてしまった選手が多かったが、今年その反省を生かせるかが焦点となる。

全日本オリエンテーリング大会、男子選手権クラスはここ 10 年村越対鹿島田の争いだったことを疑う者はいないだろう。かつてはこの二人は全く別の次元でオリエンテーリングをしていたとも言えた。ここ数年、他の選手もレベルアップし実力的には肉薄してきたといえる。以前のように村越が出る大会は村越が優勝、出ない大会は鹿島田が優勝ということは過去の話である。今年度に関して言えば、村越は一度もエリートポイント大会を勝てていない。鹿島田も優勝できなかった数の方が多い。しかし、それは通常の大会においてである。全日本は二人の対決であった。他の選手の実力アップの顕著なここ5年だけでも実は村越は 4 回優勝、鹿島田も 4 回準優勝。とはいえ、明らかに勝って当然という状況ではない。むしろ、何故他の選手が勝てなかったが話題になるようになってきた。そして、今年も村越は本命ではない。

▲村越、菅平高原の雪原を走る

今年の村越は例年とは違う。今年度の大会成績と言えば、全日本パークOで 3 位、西日本では 10 位、森林公園イベントでも 4 位。一つも勝っていない。また、全日本に対する意気込みも控えめである。

「まずは良いレースをすること」
「勝ち負けには拘らない」

全日本は「世界選手権で結果を求めるため」のステップだと言う。
しかし、それは調子に合わせうまく大会への動機付けを高める村越の巧みなコンディション作りではないか、と鹿島田は指摘する。トレーニングは仕上がってきているようで、2 月 9 日の関東リレーではトップラップに迫るタイムを出している。今年も勝負する材料はそろってきているように見える。

全日本はベストパフォーマンスを発揮したからといって勝てるわけではない。他の選手全てに勝る結果を出せないといけない。勝ちを狙いにいけば、ついつい 110%の力を出すことが必要に思えてくる。そして、一つ一つの小さなミスが大きな精神的なプレッシャーになる。村越が今まで勝ててきたのは他が精神的なプレッシャーの中、80%のレースしかできない時に 100%の力を出し切れてきたからだ。村越が勝てるか予想は難しいが、精神的な面で一枚上手で有利に立っていよう。

全日本で常にトップパフォーマンスを発揮してきた村越と対照的なのが、松澤である。ポテンシャル、シーズン中の成績から見れば、全日本では不本意なレースが多い。一昨年優勝したとはいえ、誰よりも松澤自身がそのことを自覚している。昨年も優勝候補に挙げられながら脆く崩れた。

「ワールドゲームズが終わり 2005 年に向け盛り上がる中、日本で勝っても世界で勝たないと意味がないと思ってしまいました」
日本では勝つことが当然。圧倒的な力で勝てないと世界で勝負などできない。
「そのせいで、追い込まれていき、ストレスがたまってしまい、全日本でも結果が出せなかったと」
だが今年は日本で競いあうことが世界につながると素直に思えるようになった。日本で思ったように勝てないとしても、それは「3, 4 年前と比べ皆がレベルアップしたから。そういう状況を認識できるようになった」
とはいえ、一年間の取り組みとしては「ラップ解析で巡航速度 97%、ミス率 3%」を目指してきた。巡航速度は周りのレベルアップもあり、果たせていないが、ミス率は 3%に抑えられるようになってきた。その結果、今年は全日本パークO，京葉オリエンテーリング大会、そして秋に入り、東、西日本など、最多の 4 レースで優勝している。

全日本に関しては、「昔の地図では難しくなかったが、プロマッパーが入っていることにより地図が変わり、地図が変われば課題が変わる」と警戒している。そして、その日に対するコンディショニングとルートチョイスが結果を左右する、と考えている。だが、今まで村越と鹿島田で背負ってきた、常に勝たねばならない、というプレッシャーをどう対処するか。それが松澤にとって最大のポイントとなりそうである。

▲高橋善徳
初めての優勝を新潟で飾るか？

松澤同様、期待されながら昨年大きく崩れた高橋は今年も優勝候補の一人である。
「トレーニングは出来ています。爆発的に早いとは思いませんが、調子は悪くありません。優勝には拘っていないけど、大きなレースで結果を出したいとは思います」

今年からフィンランドに滞在し、世界を目指す。その前に「金メダルを手みやげ」にしたいと思っているのではと松澤は言う。
しかし、高橋本人は「日本のタイトルことに興味はありません」
昨年は入れ込みすぎて失敗した。その反省でもある。完璧なレースをしないと勝てない、そんなプレッシャーが大きかったのかもしれない。結果に対して目がいきすぎた。
「基本的な技術をがまんして正確に行う」
藪の中のナビゲーションが多くなれば、スピードの出るロード区間で松澤との差もさほど問題にならない。ポスト周りでの一つ一つの技術がしっかりこなせれば、互角の戦いが出来るだろう。

高橋と並んで注目されるのはスピードのあるレース運びが定評の紺野である。ショート、リレーなどでは滅法強い。その反面、60分を越えるレースになると、集中力が欠ける場面もあり勝つことが出来なかった。

▲紺野俊介

この紺野を村越や松澤よりも怖い、と鹿島田は言う。
「OC大会を大差で勝ったが、そのことで何か壁を越えたような気がする。表彰式でも以前のようなはぐらかす態度がなく、真剣さを感じた」
一方、今回の早稲田のラップでも見られるとおり、前半は遅く、後半でほぼトップラップをとり続けるというのが紺野の特徴である。短い距離が得意なのとは矛盾するようだがスロースターターである。藪と道の多い今回のテレイン的な制約からは明確な勝負レッグで大きくタイムが変わってくる可能性もある。それが後半にあった場合、紺野に大きく可能性があると言えよう。紺野が集中力を保つことが条件ではある。

このライバル達の状況に「チームメートとしては皆のレベルアップは頼もしい」と鹿島田は言う。

「厚みが出てきた」
松澤は今年の鹿島田についてこう表現する。
「今まではオリエンテーリングが全てという雰囲気があったが、今年はそうでもなく、メリハリを感じる」

▲鹿島田浩二
ベテランの力を見せることができるか

鹿島田も認める。
「今年は結構調子が良い。狙っていないレースではそうでもないけど、狙っているレースでは良いレースが出来ているし、体力的にもタフに走れている」

今年度は現時点でエリートポイントトップ。エリートランキング大会も富士ロング0、東大大会、千日大会イベントと3レース優勝している。チェコのワールドカップでもスプリントで決勝進出を果たし、コンディションも上々であり、また安定度も高い。技術、走力、精神力、経験。トータルな力で言えば、優勝候補の筆頭と周囲は見ている。走りが極端に強調されず、藪の中のナビゲーション、ポスト周りの技術などへの要求がバランス取れていれば、鹿島田だ。

しかし、毎年優勝候補に挙げられながら、96年度の初優勝以降勝てていないという弱さがあったことも認める。崩れてしまう訳ではないが、「他のレースほどしっかり出来ていなかった。80点ぐらいの、不合格でないけど満点ではないというレースしか出来なかったと思う。全日本特有な雰囲気のせいもあるけど、対村越さんを意識しすぎていたかもしれない」
昨年は事前の下馬評では混戦という声もあり、あまり村越を意識しなかった。結果的には村越に負けたが鹿島田自身は良いレースが出来たという。
「村越さんは去年より上ということはないでしょう」と言い切る。むしろ、他の紺野や高橋といった若手が怖いという。同時に「チームメートとしては若手のレベルアップは嬉しい」と余裕を見せる。

村越対鹿島田。このように全日本が語られることはもうないだろう。全体のレベルアップにより消えたこの構図。最も望んでいたのは鹿島田かもしれない。
最後に「後の（世界選手権）のことを考えると皆良いレースをして欲しいけど、今は自分が良いレースをすることしか考えられない」と鹿島田は付け足すのを忘れなかった。

日本ランキング 2/19時点		
1	鹿島田浩二	83
2	松澤俊行	80
3	高橋善徳	78
4	加賀屋博文	77
5	紺野俊介	75
6	山口大助	74
7	篠原岳夫	73
8	村越真	71
9	柳下大	69
10	菅原琢	68

（山本英勝　hidi_o@yahoo.co.jp）